

如何死すべきか

特24

93

博士  
教授

紀平正美著

日本講演通信社發行



始





特241  
93

# 街頭パファントル

軍部に告ぐ	齋藤隆夫 述
軍部の決意	松本富雄 著
二・二六事件の真相	日本講演通信社編
米穀商は没落か	岩木哲夫 著
何故に電力を國營にするか	頼母木桂吉 述
なぜ電力國營に反對するか	電氣協會編
革命のスペイン	阿部直之助 著
南進論とは何ぞや	長谷川了 著
廣田内閣はいつ迄続くか	石田三郎 著
内田信也と疑獄秘話	石田三郎 著
軍部に警告す	石田三郎 著
日獨伊協定と外務省を衝く	柴田武福 著

日本講演通信社發行 定價 拾二錢 送料 二錢



紀平正美 著

如何に死すべきか

日本講演通信社發行





如何に死すべきか

目次

一、日本精神とは何ぞや……………四

二、「やりとり」と云ふことは……………六

三、「むすび」こそ日本の姿……………八

四、日本精神の發揚……………二

五、日本精神は宣傳を要せず……………六

六、和を以て貴しとなす……………七

七、結び合ふ力と日本……………九

八、如何に生くべきか……………三

九、如何に死すべきか……………三

十、商大生急轉向の原因……………五

十一、日本人に對する最大の公案……………六

十二、和合こそは日本の根本的な力……………六

十三、人と神との和合……………三

十四、人と機械との和合……………三

十五、善と惡との結合……………五

十六、魂と魂との融合……………四〇

十七、人間究極の道……………四三





## 如何に死すべきか

文學博士 紀平正美

(4)

### 日本精神とは何ぞや

私も明治時代の教育を受けたものでありまして、殊に西洋の哲學乃至論理學といふ如きものも學んだものでありますが、扱てそれを學んでゐる間に、どうも心に落着かぬ感が起り、色々と考へ

てその落着く所は、結局子供の學びの基礎となりました東洋の精神が元とならなくては、落着かないといふことに氣付いたのであります。またその當時には日本と云ふやうなことはまだ充分考へて居なかつたのでありますが、段々年が進むに従つて、日本精神と云ふやうなことを考へ

ねばならぬと云ふやうなことになつた。最近になつて、更に其れに拍車をかけられたのは例の左翼思想が非常に扨つて参りましたことであります。その時代から特に日本精神と云ふやうなことを言つて居つたのであります。

所が多くの若い人なり、一般の學者なりは云ふ、ラヂオが出来、飛行機が飛ぶ時代に、そんな狭い日本國のことをどうして云ふのか、そんなことを言ふのは、まるで誇大妄想狂だ、ドンキホーテだと云ふやうなことで、現に私の友人からも私はドンキホーテと云ふ名を戴いた位であります。

さう云ふやうな時代に、日本精神と云ふことに就てよく人から聽かれました。お互ひ日本人である以上、日本精神を有つて居るのであります。併しそれは餘り平常のことであつて、何か外に新

しい理論とか、新奇のものを求めると云ふやうな人々、ことに學者はそんな事を云ふも承知はしないのであります。元來日本の歴史がいつもその通りになつて居ります、平常心が最も大切なのであります。却てそれを捨て、外國製の巧妙なる理論を喜ぶといふ様な風であります。歴史の事はさて置きまして、日本精神とは「何ぞや」と云ふことを問はれます。所が日本精神はお互ひに有つて居ることあります。それは「何ぞや」と云ふ所で我とは何ぞやと問ふと同じで考へ様のない次第であります。後で段々お話を申し上げますが、之を「何ぞや」に答ふべき定義にすることは出来な

(5)

い、自分を他人から定義して貰つても、それでは誰でも満足は出来ぬ、人から言はれてその通りになつたら、それは自我意識のない機械のやうなも



のである、そんなものぢやないと云ふ心持は誰も起る。

### 「やりとり」と云ふことば

日本精神はどう云ふ具合に働くかと云ふ働き方なればそれは云ひ得られるのであります。それを私の説明する方法をお話しますには、今日に至るまでの経過を御話し致さなくてはなりません。が、それも略します。結局私はそれを簡単に國語

によりて表明することを考へたのであります、極く簡単であります、「やりとり」であつて、西洋人の如き「とりやり」ではない。それと關係して又西洋では買ひ賣りと申しますが、日本人は賣買と申します。即ち日本では自分が一生懸命になつて生産したものを、他へやつて即ち賣つて、そして

必要なものを取つて即ち買つて来る、これが日本の本來の建前です。日本ばかりでなく、支那でもすつと昔の周の國の建前も、日本と等しく農業を基として居た國でありますから賣買といふ語が出来て居るのであります。賣買と云ふ心の持ち方、即ち一生懸命に生産し、其の餘分を他へ賣り、自分に必要なものを買つて来る。日本人が持つて居る心持といふ意味に於て、今日の總ての問題、産業の問題も結局解決が出来るのであります。

「やりとり」「うりかひ」といふ語は日本人ならば平素言うて居ることでありました。其の言はれて居ること通りにやればそれで立派な日本精神は現はれ實行しつゝあるのであります。只今の日本の産業の躍進の姿が即ちそれであるのであります。之を逆に申しますと、買賣、そしてこれはイギリ

スで最も極端にやつて来たものであります。自分が生産しないで他所から物を買つて来る、然も時には單純に取つて来る、而してその間に利益を得て他所に賣る、此の機構に於ては利益と云ふものより外は何もない、それと反對に賣買の機構では、自分で生産しなければならぬ、そしてその生産の働きはどうか云ふ具合であるかと云ふことは暫く置きまして、兎に角西洋に於きましては、どこかの國に行きましても、賣買と云ふ言葉を使つて居る國はない、皆な買賣です。

それと同じやうに日本に於て、今申しましたやうに、智識層の人々や、西洋の思想を受けて居る者には混亂がありますが、一般には「とりやり」とは云はない、「やりとり」であります。「やる」即ちそこに私が茲に「如何に死すべきか」と云ふ問

題を出した所以であります。先づやることが先であつて、而て後に取ると云ふことが、日本人の究極の落着きであります。

後で申さうと思ひましたが、今こゝで申します方が便利と存じます。八聖殿は八人の聖人が祀つてありますが、此等聖人の説く所は技葉の點に於て相違があるにしても「やる」と云ふことが結局善の善なるものであると説くの外はない、種々其名は異なるが畢竟は人の道、人の道とは和合である、和合は「とりやり」では出来ない、先づ「やる」で、自分の徳として「とる」より外に方法はないのであります。故にこれも後で申さうと思つたことではありますが、茲で先に申し上げて置きます。

般若心經は御承知の通り、觀自在菩薩の修業の



方法を簡単に書いたものであります。極く短かい  
経文であります、それは我を空することを説いた  
もので、中頃に「一切の顛倒夢想を遠離す」とあり  
ます、顛倒夢想とは「とる」ことを主とする我執  
であります、それを遠離することが、涅槃の究極  
であり、同時にそれは一切の苦厄を濟度する力で  
あることを説いたものであります。それで最後に  
全経文の意義を簡単にした呪文があります、それ  
は御承知でもありましょう、調諦、調諦、婆羅謁  
諦、婆羅會謁諦、菩提、といふのであります、  
それを日本語流に翻譯しますと「ヤレ・ヤレ・ア  
レニヤレ」アレと云ふ、こゝに氣をつけて下さ  
い、それは御話の中心点になりますから「ヤレ・  
ヤレ・アレニヤレ・アレニヤツテ仕舞へ、（これ  
ぞ）正智なる、空賢」といふのであります。故に

個人としては迷ひの凡夫も多いわけでありま  
すが、全體の日本人としては、「やりとり」に於て安  
立する日本は觀自在菩薩の修行をして居るのだと  
見ることが出来る。斯く見るときに全體としての  
日本の立場が實に明白になるのであります。

### 「むすび」こそ日本の姿

日本の神典として最も大切なる中心をなす所の  
古事記の如きものさへ西洋の學問が入つて來まし  
て、世界各國にもある如き一つの神話であり、然  
も甚だ素朴なもので他と比較にならないものだ、  
素盞鳴命は嵐の神話だ、天照大神は太陽の神話だ  
などと西洋流に解し去つたものであります。併し  
上述の如くに八聖の教へを考へ來るときは、始め  
て人の人たる道を其の儘説いたものといふことが

知れるのであります。古事記は太安麻呂が天皇の  
大命を受けて古き物語を編纂したものであり、そ  
れが中心となり、數年後れて、古記を其儘に編纂  
した日本書紀が出来ましたのであります。古事記  
は天武天皇の御詔をかりて、明了に其の目的を表  
文即ち序文に明記して居ります。即ち、「斯は乃ち  
邦家の經緯にして王化の鴻基なり」と、即ち日本  
と云ふ國家の組織を明かにし、天皇が人民を治め  
仕せられる基本原理だといふことであります。  
乃ち日本の國體の精華はたゞ古事記一番に於て  
盡きると言つてもいゝ程であります。それをば日  
本人は忘れて今まで西洋流の考へ方でそれを見る  
ものであるから、詰らない最も平凡な神話を見て  
居つた所に、大きな間違ひが存在して來たのであ  
ります。日本の神々は皆な實在せられた尊或は命

であります、其處で他と相違するのは日本人は  
其の御方の御働きを主として神と崇めたのであり  
ます。古事記の始めに語られるものは、天地の初  
めになりませる神の御名は天の御中主の神、次に  
高皇御産靈日神、神産靈日神とあります。即ち簡  
單に申せば天の御中主神の御働きをば、兩神の働  
きたる「むすび」で表明したのであります。

「むすび」と云ふことはどう云ふことであるか、  
紐を結ぶの結びです。手を結ぶの結びです。同時  
にそれは和合であり、和合の内に生産が出来る、  
故に「むすび」は又生産の働きであります。此の  
結びの働きはどうして出来るか、左の手と右の手  
とが西洋の個人主義のやうに互に權利の主張をや  
つて居つては結びは出来ない。或は歩くのに左が  
左の權利を主張し、右が右の權利を主張して居て



は歩けない。手が結びあふのもやり取りの関係に於て出来る。紐を結ぶのでもやり取りと云ふ關係に於て結べる、兩足は又「やりとり」によりて歩行と云ふ「むすび」が出来る。子を産む、草木の生長も「やりとり」關係に於て出来る、即ちこれが根源であります。

日本人の働きは結局むすびの働きをその根源とする云ふことあります。それで天津神から伊弉諾伊弉冉兩神が大命を奉ぜられるが、國づくり、即ち「修理固成」と云ふことであります。修理固成と云ふことは、造り固めなすと云ふ事、即ち又結ぶことを一層複雑にした考へであります。混沌たるものから結び合ひによつて漸次に組織的なものに大成して行くと云ふことであります。これがつぎ／＼に複雑なものとなり、人の心の働き

といふことから、天地、神人の結び合ひとなる、それが天壤無窮の神勅であります。その結合ひをする仕事、その中心が天の御中主神であり、その直系結び合せの中心その儘が皇位であり、又天皇は世々其の働き其の御仕事をお続けなされて居るのであります。これが日本の國體であると同時に、我等帝國臣民は其の大業の翼賛者であるといふのが日本の姿であります。

之を各聖人の教に就て、考へて見る、即ち哲學に就て考へて見ると、哲學は其の中心を一定の原理とする、宗教ではそれを神とする、或は佛とする、日本は神や佛や元理を定めずに、それを天皇の御仕事と見るのであります。其仕事への参加は結局己を空しうすると云ふことにある。然し中々己れを空しくするといふことは出来ないものであ

りますから、方便として種々の方法が説かれたに外ならぬ、日本にては其方便即ち國家組織なのであります。

聖德太子のお言葉である「歸依即行善」といふのも、佛への歸依であります。それは畢竟 天皇へでありました。親鸞日蓮等の表白した仕事も亦絕對歸依であり、それは天津神の命に絕對歸依する。陛下に歸依して行くと云ふ事を本とする、日本であつたでこそ、印度に始まり支那に於て理論として、發達した大乘佛敎を完全に日本のものとなし、六ヶ敷い理論と通俗一般人の行へもつて行くことが出来たのであります。即ち日本人は結びの大行者としての佛、神、即現人神たる 天皇陛下を中心として尊ぶのが日本帝國臣民であります。天皇からは「天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」と

仰せられて居ります。

故に帝國臣民とは單なる個人主義の言ふやうな個人でない、又單なる宗教家の言ふやうな煩惱具足の凡夫、又罪惡遺傳の惡人ぢやない、然し帝國臣民としては初めから「分」が定まつて居て、分に從ふ「つとめ」がある。即ち歸依する所に己の分がある、例へば一つの家なら家を考へて、祖先に歸依すると云ふ所に、家長は家長の分があり、妻は妻の分が立つて来る、其の分に對してはたゞ積極的な務めがあるのみで、權利の主張に非ず、義務の負擔にも非ずといことになる、斯る國が他に何處にありますか、聖人來たつて之を教へると雖も、それを實行せず惹くそれを自分のものとして理窟を言ふやうなものばかりが世界に充ち満ちて居るが、たゞ日本のみが「やりとり」と云



ふ關係に於て、自然に即ち知らず識らずの間にそのよき理論をば事實やつて居るのであります。

この間も驚きました、否な驚きには當らぬ、日本としては當り前のことではありますが、私には外孫が居りますが、そこへ私の妻が行くと、何でもおばアさんにやると言つておばアさんくと言ふ、中にはおぢいさん、これを持つて行つて、おぢいちゃんに上げよと言つてくれる、始めから、尊敬する人にものをやるといふ様に日本の家庭に於ては育つて居るのであります、小さな時から「やる」ことを稽古さす、おばアさんは小兒の手垢のついたものを貰ふのは嫌だけれども、兎に角孫がくれるのですから貰つて食ふ(笑聲)すると子供は嬉しがつてゐる、やることを以てよりよしと子供の時から訓練されてゐる。西洋の子供は絶

對にそんなことはない、取る／＼一方です(笑聲)

### 日本精神の發揚

それで色々さう云ふ實例を申し上げますと、きりのないことではありますが、さう云ふ風に訓練されてゐるのが日本の始めから、開闢以來、また建國以來、今日まで到つて居る、勿論時にそれにも盛衰はあります、何んとなれば日本人も、西洋人も何處の人間でも、人間でありますから、自己意識を有つ、其の限り自分の主張はやりたい、殊に近世になつて、イギリスが中心になります、個人を本とする考へ方が主となり、とることを主として、他を搾取してしまふ。總ゆる植民地から搾取する、さうして偉大なる大英帝國をなした。世界はいつの間にかそれを眞似した。獨逸は或る意味

(12)

に於て日本とよく似て居る性質を持つてゐるが、それでも英國に引づられた、所が最早とるものになくなつて来たからイギリスが苦しくなつて来た。イギリスはこれで根本を改めずば没落であります。没落と云つても俄かになくなるんぢやないが、イギリスは最早衰運の域に向いてゐるのであります。

昨今の新聞を御覽なさると、彼は依然として世界的工作をしてゐるが、今までは自分が一口云へば世界が言ふことを聞いてくれたが、最早今日ではそう言ふことを聞いてくれないそこに個人主義の一轉回期が来たのであります、此の期に乗じて日本の底力が地下水のやうに潜ぐりこんで入つて行くのであります、そして其の日本の力は又決して個人主義の様に計畫的にやつたのではない。計

畫的にやつたもので何一つ成功してゐるものはない。計畫しないが、日本も困つたあげく日本の本來の力に還つたのが向ふの間隙に乗じてしみこんで行つてゐるのであります。

現在日本がどうなつてゐるか云ふことは、日本人自分らもびつくりしてゐるやうな状態であります。それはみな日本精神の致す所で、やること云ふことが主になつたからでありますから物の生産力、創造力が強く現はれたのであります。従つてやるが主であるから宣傳なんかしない。此の事に關しても亦日本人と西洋人との差が生ずる。日本の今日の状態を見て西洋人が驚く、メーソンと云ふ神道研究者がありますが、これに付ても亦一寸申上げることがあります。

昨日も名はお預り致して置きますが、或る支那

(13)



人が私の所にやつて参りました。これは支那の革命の際に五ヶ年も一緒になつて仕事をした人ですが、現在のやり方は支那を救ふ所以でないといふので、日本に来て日支協和の基礎を置きたといふのであります、此人は最近に武徳論と云ふ大冊を書きました。それは儒教の精神を悉く日本が實行してゐる、それが日本の武士道である。其處に日本の強い所がある、然るに其の本をなす二教が支那民族の内になくなつた、と云ふことを慨歎して此の書を書いたのであります。

前からその人と手紙のやり取りをして居つたのであります、二十五日の夕方東京に着いて、七時間の後にあの事件が起つたのであります(註)それで私は「さぞ驚いたらうな」と言ひますと「私ちつとも驚きませぬ、日本には明治維新といふも

のがあり又近頃昭和維新といふことが云はれて居るのを知つてゐますから、今度もそれと同じことが起きたのだと思つて決して驚きませなんだ」と言つて居りました。西洋なら大革命が起つたと云ふことになりましたが、又實際大革命まで行くのであります、それが大變なことにまでならなかつた所に日本の今日の姿を見なければならぬのであります。(註、二・二六事件)

さて今申上げました神ながらの道を一生懸命に研究して居るアメリカのメーソン氏は又其の驚かなかつた一人であります。帝國ホテル滞在の外國人は皆な西洋流の革命が起つたと云ふので大騒ぎをして居るのを、メーソンが演説して「日本人はさう云ふものでない」と云ふことを言つたさうであります。日本人の持つてゐる力は却つてさう云

ふ人には判るのであります、さて根本の力は個人主義に育つた人には中々判らない、然しこれだけは判つて居る、單なる理論では中々うまく往かない。

「天皇と云ふ立派なものが居らないのが實際に統一の出来ない唯一のことであつて、我々いくら工作しても、さう云ふものを俄かに拵へることは出来ないものだ」と言ふことであります。それはその通りであります。日本人はいつかの暇に大詔に隨順する、奉公の志、そこに統一、纏めることが出来る、獨逸人が今日非常に困りまして、何か一つの統一を付けやうと思つて居りますけれども、氣の毒に 天皇と云ふ如き存在者がないので困つてゐるのであります。絶對歸依の主體が、而もそれは單なる理屈ではなくして、現存者があるとい

ふことが、日本独自の力であります。結局此處に並んで居られる聖人達は、その時代の非なるに憤激して、これではならない、即りとり合ひではない、やり取りにしなければならぬぞと云ふことを教えてゐる。

然し其れには「あれにやれ」といふ現存のあれがない、故に議論として教へるだけである、故に理論は中々巧妙になるが、現實を離れる、基督教でも佛教でも、猶太人や印度人を離れてしまつた、さう云ふ人々に理屈をいくら言つても駄目です。それを我々學者が普通理屈で言つて居るが、それでは駄目、不斷さうやつて居ることが、さう云ふ理屈でなければならぬ。殊に先刻も申上げました通りに、西洋の理論は悉く取り合の關係に於て出来てゐる。然もそれは立派な理論であり巧妙



を極めて居る、それを新しいもの、よりよきものとして今まで學ばされて來てゐるので、所謂智識階級のものが古は漢土天竺のもの、今では悉く西洋流の理論の巧妙さに中毒させられて來た。今日では子供の時代からさう云ふことで教育されてゐるから、日本の本質を知らずに進むで來た。然し、明治天皇が御歌に御示になつた如く

大和心のおゝしきは時あるごとに

あらはれもすれ

でありまして、愈々一朝事があると、表はれる、即ち、天皇の御命によつて一つになつて來る所に本來の働きが出て來るのであります。その本來の働きは無意識でやる、西洋はどこまでも取り合の關係ですから、意識的にやらなければならぬ、日本はそれを自分を忘れてやる。

### 日本精神は宣傳を要せず

此の偉大な力に就て西洋人は驚くのであります。それで彼等は何故に此の没我的の立派な日本精神をばもつと宣傳しないかといふ、つまり日本が判つて來ると、日本のは西洋人の如く奪ひ合でないことを知る、例へば滿洲國でも西洋人ならば奪ふのであるが、日本人のは滿洲國を建て、やるのであります。それで日本人はこんな立派な日本精神を何故もつと宣傳してくれないかと云ふ。昨日の支那人でもそう云ひました、支那の方は斯う云ふ日本を何故もつと宣傳してくれないが、支那人は、日本は、只武力で我々を斷壓すると云ふので怖がつて居るんだから、それをもつと日本は支那を取るのではない支那民衆を助けるのだといふ

(16)

ことをもつと宣傳して下さい」と頼んで居りました。それから、メーソン氏でも、一昨年歸る時に「日本の神道を世界に宣傳してくれ、ばいいが」と云ふ大演説をして行きました、又氏は現に世界に宣傳をやつてゐてくれるのであります。

然し日本人とすると何も宣傳するやうなことはやつて居ないのであります。平常の事に過ぎない、同時に宣傳するやうになつたら、却つて日本精神は駄目になるとも申さねばならぬ、宣傳しない所に良い所がある。然し何につけ宣傳することの拙であることは申すまでもない。其の性質は如何にも今日の商戦などには損であると見なければならぬが、其の國民性のよつて起る所は、何事も一生懸命にやつて居るときは、日本人は利害を超越するからであります。

ともかく今日西洋人の驚く點は彼等が行き詰つた時に我が伸びつゝあることで、其の力はお互によく考へて御覽なさい、例へば子として親の爲に盡して居るのは、子として當然のことをして居るに過ぎぬ、何もそれを宣傳する用もない、宣傳する様なことは却つて、親の爲になつて居らぬ、本當に親の爲に盡すのは、孝行とは、斯う云ふものであると云ふことを宣傳したら、それは孝の理論の宣傳であつて、實は何も出來ませぬ。己の分を盡す、己の務めを盡すと云ふことは、積極的にはたゞ足らざるを憂ふのみ、宣傳の暇ない程であるべきであります。

(17)

### 和を以て貴しとなす

それで人の和合を保つ根本は「やりとり」の關係



であります、個我を主とする限り、それが「と  
りやり」となり、個人主義の國ではそれが出来な  
い。日本人のみがそれが出来るといふことに歸着  
するのであります。先刻も申しましたやうに日本  
人だつて己と云ふものが可愛くないものはない。  
理窟を言はないのではない、然し理窟を言つて居  
る時は自分を立て、居る、又自分を立てやうと思  
ふから理窟を言ふ。一家の内でもちや、ばばア  
が自分を偉いものと思ふから理窟を言ふ。だか  
ら嫁が困る、家庭にごたくが絶えぬのでありま  
す。嫁にしても、近頃の嫁は理窟を言ふ。(笑  
聲)それには日本の新しい教育が間違つて居た所  
に原因がありますが、近頃では理窟の一つも云へ  
る人が女子教育家であるから致し方がない、然し  
理窟で騒いで居る婦人連は家庭の人ではありません

ん。一般に理論が重んぜられる所からして近頃は  
一寸止まつたが、自由主義大流行の時には認識不  
足といふ語が又流行した、自分の言ふことが通ら  
ぬと彼は認識不足だからと申しました。然し二十  
代の人間が六十代のばアさんの認識を高めるやう  
にと言つても出来るものぢやない、親の認識する  
所と子の認識とは自ら相違する、故に認識で親子  
や老人と青年とは和合が出来ない、一家内のもの  
が互に認識し合ふといふには既に其の根底に和が  
成立して居るからであります。

こゝにも顛倒がある、認識で和が成立するので  
はなくして、和があるから互に認識が出来るのであ  
ります。日本國民が事がある時に、たゞ 天皇陛  
下御一人の下に固つて行く、この和合の力、これ  
は大きな力であります西洋では理窟で和合しよう

とする、然しそれは一時の妥協に過ぎない、故に  
事あるときは分裂であります。

聖徳太子は「和を以て貴しとなす」と憲法第一  
に仰せられて居りますが、其の和とは一時的妥協  
といふ様な、今日云はるゝ平和主義といふ様なも  
のではなく根本的の「むすび」合せであります、  
それが修理團成であります、結びには同時に  
つれたものを切斷しなくてはならぬ、故に兩神が  
此の仕事を受けられるときに天神から「天の奴才」  
をも賜はつて居られるのであります。即ち眞の平  
和には武が必要である、口先の理論の平和には  
それは用はないのであります、**「まつろはぬ」**も  
のは武を以て叩きつけければ、本當にやると云ふ氣  
持にはなれないのであります。

故に、日本はどこまでも武を中に包む所の和合

である、丁度核を中心とした一細胞を爲すのであ  
ります。それによつて神武天皇が都を大和の橿原  
に建てられた時に「六合を兼ねて以て都となし八  
紘を掩ふて以て宇となす」と仰せられてゐる。日  
本の道は即ち宇宙の大原則である、お互ひみんな  
が結び合ふて一つの有機的團體即ち國家になつて  
居る。

### 結び合ふ力と日本

若し世界萬邦が日本の様にともに結び合うて一  
つの働きをなすことが出来たならば、始めて世界  
平和が出来る、現に滿洲國を創めたのは、たゞそ  
れを取るんではない、滿洲國に結合つて行かふと  
するのである、これは日本の道が世界に光被して  
行く第一歩で、又神武天皇の大理想の實現に外な



らない、斯く三千年の準備が終つて今日日本は發達の途上にある譯であります。さう考へますと、先にも申した如く佛教を生んだ印度人でも太古は日本人の通りであつた。支那でもさうであつて日本に近い、殊に儒教の起つた所は、周の國が農を本として和を本としたことでもあります。即ち周の國と日本とはよく似て居るのであります。所がその周の國が文、武、成王、とつづき穆王の時代から段々分裂しかけて後が春秋戰國の時代となつた時に、それではならないと考へたのが孔子であつて仁即ちやりとりを教へた。所が孔子の言ふことを一般の人々は最早聞かない、それで愈々個人主義に陥り今日にまで及んだのであります。

キリストに例に取つて見ます。太古の猶太はさし置き後の猶太人は此地彼地と流浪しなくてはな

らなかつたそれではならないと云ふ所にモーゼが主となつてエジプトから遁出して、元の猶太國に入つた、其時民族を結合する爲めに彼の十誡を立てたのであります、然し國へ歸つてもやつぱり喧嘩してゐる、思ふ様な天國ではなかつた、それが爲に十誡に對する理論のみが榮えた、そこで「やりとり」をやれと云ふことを言つたのがキリストであります。所が猶太人はそれを聞かない、世界一般がそれを聞いた、それが基督教であつたが、今日は世界が個人主義の完成、理論の世界となつて來て、最早それを聞かないことになつた。更に昔の希臘も日本に似て居たが、都市の發達と共に、個人主義的になつた、これでソクラテースとプラトーンは、同じやうなことを説いたのであるが、ギリシヤ人は最早それを承知しなかつた。そしてソクラ

テスを殺し、希臘自身が没落してしまつて、今日のギリシヤの様になり、希臘的精神と言つて今日にまで残つて居るものは知識即ち哲學である、和合の働きは知りませぬ、今日では理論でのみそれを考へる故に各種の社會主義となつたのであります。

更に日本に於ける宗教の一つに似て考へて見ます。道光にしても、親鸞にしても、日蓮にしても、結局は結び合ひの働きを説いて居るのであります。その方法には相違があるにしても、それはみなその時代／＼に於て見る處が相違したに過ぎない、然し結局はバラ／＼になつて來た人々を結び合はそうとするに外ならなかつたのであります、そしてそれは日本天地開闢以來から、開闢それ自の原理として來たものを深めたことに外なら

ぬ、斯くその儘今日まで行つて居るのは、世界廣しと雖もたゞ日本國あるのみ、斯く總てが日本にては世界各國とは考へ方、また考への落着き方、又平生の生活の仕方が、アベコベ即ち轉倒してゐるのであります。だから先刻申しましたやうに、西洋的に考へないで、日本的に考へると云ふことが、我等にとつては大切なことになるのであります。

### 如何に生くべきか

それで日本精神を理論的に説かふとしますると、斯く個人主義とは違つた點などを、私共の専門の方から見ると、簡條書にして、且つそれを組織しなくてはなりません。所がこの間の事件に就て、段々考へて居つた時に、私は西洋の個人主



義では如何に生きべきかと云ふことが最後の問題である、學問でも如何に生きるべきかの方法を考へてゐる、西洋のみならず支那でも、印度でも、悉く如何に生きべきかと云ふことが主題である、だから死んでからでも猶ほ生きて居りたいといふことから天國を考へ、極樂淨土を考へて居る、それが所謂宗教である、宗教とは、端的に死んでから後も猶ほ生きて居たいと云ふことに外ならぬ。

(笑聲)

日本人にも猶ほさう云ふものがありますから、さう云ふものはそうして置きます。併し道元にしても、親鸞にしても、日蓮にしても、殊に日蓮は何と言つて居るか、佛教あつての國家、ではなく、國家あつての佛教だと云うて居るのであつて、道元でも親鸞でも特に國家とは云はぬにして

も、現在日常生活に於て我々が和合して行きさへすれば、それが即ち天國であるとするので、死んでから後の問題ではないのであります。

和合するにはどうしたらいいか、自分を殺さなければならぬ、自我の主張を殺さなければならぬ、然し自分を殺すことは中々出来ないから、それには佛を師と仰ぐとか佛の命令を其儘實行するとかするのであります。親鸞にしても、初めは極樂淨土に行かふと云ふことが目的でありますけれども、最後の究極の落着き所は、何とあるかと云ふと、これは教育勅語に示さるゝ末句と同じことであり、其の徳を一にすることが主眼となつて居る。

「阿彌陀如來の三業と念佛行者の三業と  
彼此金剛の信なれ 定聚の位に定まりぬ」

というて居る。阿彌陀如來の仕事も、我々の仕事も肝腎な歸依即行善と云ふことに於ては、同じ仕事であるといふことに安立して居るのであります。即ち 明治天皇が又それと同じやうなことを教へて居られるのであります。「朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其徳を一ニセムコトヲ庶幾フ」即ち上皇祖の御教を奉し、お前達と同じやうになつて、一致協力大業を遂行したいとの御仰せであります。

### 如何に死すべきか

斯く究極の處、何も極樂淨土に行くのではない互に其の徳を一にし信じ樂み合うて行けば、それが現實の極樂淨土、而もそれは日本の國の建設と云ふ所に結局落着いてしまつて居る。だから西

洋ばかりでない、總て個人を建前にして行くものは皆な如何に生きるかと云ふことを問題にして居るのであります。日本のみは、今申しましたやうに如何に死ぬべきかと云ふのが問題である。日常生活の上にも、如何に自分を殺すべきか、犬死してはならぬのであります、これは武士道の喧しく言ふことであります。大死一番が必要だ、一死一番、立派に死んだ人は日本は神と崇めて祭る。故に如何に死ぬべきか問題であります。其の問題の解決が究極日本人の落着く場所であります。

大乘佛教の理論では、菩薩道をば、よく自利するが故に利他すと説きます。これは英國などの自利と他利との並行を説くのは非常な相違で、利他する爲には自分は既に他に「やら」なくてはなら



ぬ、然し宗教的に考へるが故に猶ほ自を利先きとしますが、既に古く日本の傳教大師は利他を先として居ります、即ち其處に最早日本佛教の先驅があるわけでありますが、心經に云ふ「あれにやつてしまへ」日本では直接に天皇にやつてしまへ、即ちそれが如何に死すべきかの具體的方法が其處に最早示されて居るわけであります。

即ち「克ク忠ニ克ク孝ニ」となるのがそれであり、即ちそれは如何に生くべきかの方法でなくして、如何に死すべきかの方法と解すべきであります、然るに今忠とか、孝とかをば概念的に取扱ひ、之を理窟で論述しますると、忠孝と云ふ働きが失はれて来る、これが從來たゞ理窟として考へて来た弊害であります。如何に理論的に巧妙に忠や孝を説いても、忠臣孝子を産み出しは致しま

せぬ。

私が、今やらさして頂いて居ります仕事の一つに左翼運動に依つて罪を得た學生の教育といふのがあります。それ等の青年から色々に實際のことを教へて貰ひ、却つて日本人の特性が判つたわけであり、親に孝を盡せと言つて、いくら理窟を言つても、孝は盡せるものではない、親とはなんだ、いゝ加減に子供を造へて置いて何んで孝行を要求するんだ、といふのが、一般の科學から出た議論であります。

實例を申し上げますと「私の親は斯う云ふ親ですが、そんなものに孝行する義務がありますか」と言つた様な質問は從來幾度もうけたものであります。他を生かすと云ふ場合にも、他者と云ふやうな抽象的概念のみを持ち出したとて無益でありま

す。日本は今申しました通りに、子供の時からやりとりと云ふものを、とりやり以前のものとして自然に訓練されたのでありますから、取扱うて居る青年の様に、せつばつまつた境遇から、理論から容易に其の本に還り親孝行を爲し得るのであります。それにたゞ親に孝を盡せと言つても駄目です。實際に自分の子として、親が子に全身命をやる、そうすると子として親に又全身命をやること出来るのであります。

よく理論上には又方法論と云ふやうな事が議論せられるのでありますが、議論では駄目であり、それで私は如何に死すべきかと云ふ様な題を出したのであります。方法は實際の問題から湧き出す、即ちそれが創造的進化即ち産(うむ)ことになるのであります。

#### 商大生急轉向の原因

一實例を申し上げます。これは元商科大學の學生で左の運動をやつて檢舉せられたのであります。これは頑張つて居つて中々轉向しない、この人の兩親は朝鮮に居ります。それを聞いて母親が一人の子供(弟)を連れて、東京に飛んで来た。その時に朝鮮を立つてから、刑務所に來るまで水は飲んだでせうが、一つも物を食はない、絶對的に子供にやつたんでせう、己の生命を考へて居ない、己を如何に生かすべきかと云ふことを考へて居りませぬ。子供に絶對にやつて居る。だから子供さへ轉向すれば、そこに自分の死に場所を覺悟して來た、その時はまだ面會が許されない時期でありましたが、餘りの至情にほだされて係り



の人が、それならば「面會は許すけれども話をし  
てはならぬ」宜しうございますと言つて面會を許  
された。然し現在自分の子の居るのを見て話をし  
ない譯にいかない、さう云ふ熱情にほだされて、  
端の人も最早規則など言ふことが出来なくなつた  
のであります。

その時の情態を見てその子は急轉回をした。こ  
れは後に一年私の研究所に居りまして、日本とい  
ふものが立派に了解出来、忠も孝も立派な行者と  
なり商大にも歸れましたが、卒業して、就職の口  
も定まつたその明日から、病にかゝり遂に倒れて  
しまひました。死んでも猶ほ其の母を生かして居  
ります。彼は死んだけれども、多くの人を生かし  
て居る。彼は死に場所を得たと私は言つて居るの  
であります。その他も色々な實例がありますけれ

ども、彼の話だけにして、彼が死に場所を得て死  
んでくれたと云ふことは、私共にどれだけ力を與  
へ話をする時に一つの力となつて私を生かして居  
ります。

### 日本人に對する最大の公案

支那に南泉と云ふ有名な禪僧が居つた。猫一匹  
居つた、其の猫に佛性があるとかないとか小僧主  
どもが頻りに議論をして居た。その時に南泉はそ  
の猫を捕へて、言へ／＼うまく言へば、この猫を  
許してやるが、言へなければこの猫を殺す」と、  
小僧主どもはあつけにとられて何んとも言ひ得な  
かつたので、南泉は其の猫を殺してしまつた、と  
いふ話がある。猫を殺して病を得たと云ふのがあ  
るが（笑聲）獸醫と雖も猫を殺すのは嫌がつて居

ります。然るに南泉は無雜作に殺してしまつた。  
實にその猫は死に場所を得たと云ふべきで、南泉  
斬猫と云ふ、大きな公案となつて、今に残つて居  
る。日本の歴史に残つて居る事實は、悉く云はゞ  
禪宗坊主の公案と同じである。なか／＼六ヶ敷い  
意義があるのであります。西洋流の事實と見ては  
ならぬ。

一例を申しませう。昨年は楠公の六百年祭と云  
ふので方々で楠公奉贊の話がありました。御聽の  
通り私が話をすると色々なものがこんがらがつて  
來ますから御聽取にくいと思ひます、扱てこれも  
肝腎な所だけ申し上げます。簡単に楠正成公は澁川  
に於てよく如何に死ぬべきかを解決したと云ふこ  
とであります。正成公には最早自分はない、たゞ  
後醍醐天皇の大業の翼賛と云ふことのみであ

る。此の 天皇への隨順の心はどう云ふ所から來  
たか、その爲にはその時代のことをよく考へな  
ければならぬが、そのことも今は省きます。その  
隨順の力をば武士として如何に表明すべきか。こ  
と茲に到つては最早爲すべきことは、只一死ある  
のみ、それで弟正季に問ふた。

「自分は盡すだけのことを盡したが、死んでか  
ら何れに生れようと思ふか」と。前に申しました  
通り宗教的には死んでから極樂へ行か何れへか  
行き度いと思ふのが當然で、正成公も弟も皆な佛  
教信者であつたことを忘れては前の意味が明らか  
になりませぬ。すると弟正季公は 兄さんどこへ  
行くもない、七生人間平國賊」と答へました、即  
ちそこに本當の日本精神の本質が出て來て居ま  
す。如何に死すべきかと云ふことが問題になつて



來るのが、日本の武士の精神であります。

佛教から云ふと、最後の一念が大切であり、それによつて地獄へも落ちるのである、故に佛教家である太平記の作者は、正成等公を修羅道へ落して居りますが、其の作者も日本精神をどうすることも出来なかつた、それで正成公は「罪業深きことなれど、われも亦しか思ふ」と云ひて兄弟共に死んだのであります、死んでも死なぬ護國の鬼となるといふのであります。其處に佛教も消し飛ばされたのであります。故に正成公等の死は南泉斬猫も同じく日本人に對して最も大なる公案であります。

それから、また近い話に致しますと、一太郎ヤイの御話がさうであります。自分の大事な子供が今出征して行く、喜こんで死に出すのではな

い、併し國の爲めに、陛下の爲めならば致し方

がないとして送つて行く、多くの人が見送つて居る所に、なんの女々しいことが母として言はれるか、最早自分はない自分を國の爲に陛下の爲にやり盡してしまつた所に、「一太郎ヤアイ」と云ふ語になつたのであります、そこで送られる子も捧げ銃をしてそれに對する親子の心が一つになつた。其の一になつた心が見送りの一切の人々否全日本人を結束せしむる力となつて來た、即ち良き死に場所を得たわけであります。それが日本國の根本の力であります。魂と魂との結合の上に成るのが日本の精神であり然も其の結合は一死一番の上を生ずるのであります。

### 和合こそは日本の根本的な力

(28)

それで又元に戻ります。君には忠を盡せ、親には孝を盡せと云つても、それは理窟になつてしまふ、現在の親に對してどうするか、現在の子に對してどうするかの方法が出て來なくてはならぬ、それには色々の事情があるので非常に困難であります、即ち例へば平の重盛の場合の如くになります、實際其處では自分が死ぬより外にない、此の立場に於て始めて一切が混然融和して來るのであります、どれの一つも我を立てたならば其の和が破れる、此の融和して行く所に日本の歴史を一貫して通ずるものがある。

天皇陛下に隨順すると云ふこと、それは我を立てゝの理窟でない。然るに現に存在して居られる天皇が大和合の中心となると云ふことは日本の根本的の力であります。重ねて申します。英國人で

も議論の上では氣が着かないのであります、矢張りギブ・アンド・テイク即ち「やりとり」として居る哲學者もあるのであります、實際彼等のやつて居るのは「テイク・アンド・ギブでとりやり」であり、やるのを方便にして居る。

然るに日本はそれを實際やりつゝあるのであります。いくら理窟では「やりとり」とした所が理窟は理窟に終つてしまふのであります。實際がどう結ぶかと云ふことは、單なる理窟では出來ない。そこで個人主義と日本の如くに親子關係、夫婦關係等人倫を本として考へるのみに大なる相違が生ずるわけである。たゞ夫婦と云つても個人主義のものは利害での結合である、道での結合ではない、魂と魂との結合といふことは彼等は云ふ、然し實際はそれは青年のもつロマンチクの考へ

(29)



によつたもので、高砂の媪と翁との結合の様なのは彼等には考へられないのであります。

尙ほ一つ實際の例を申し上げます。昨年秋から今日に至るまで、時々手紙を寄こしてくれる、これは長崎のある女の人であります。先刻一寸申し上げましたやうに現代の女でありますから、嫁に行つてから姑と仲が悪い、所がその姑が死にまし

た。その七日々に主人から「餅をついて上げよ」と言はれた。然し現代的の女にはそれが出来ないう、夫から叱られてもしない、とうとう一番終ひに餅をつくことになり、それを靈前へ供へた、すると其の瞬間に始めて「悪かつた」と姑の靈前に跪いたのであります。理窟で言つてもそれは駄目です。餅をついて上げると云ふ實際的の行によつて、そこで自然と死んだ姑の靈と同時に祖先の靈

と自分との間の結合ひが出来たのであります。それから此の婦人は總ての考へ方が轉回して來た、今では其の主人も死に、只一人の女の子が残つて居るのであります。それに就て手紙が來る度に私は新しき結び合のことに力添えをして居るのであります。

これと同様なことが禪の公案として臨濟慧照禪師と定上座との間にもあるのであります。禪の公案とは六ヶ敷いものとせられて居るのであります。日本精神を以て之に向ふときは實に何んでもなくそれが解けるのであります。前にも申しました通り、日本の歴史的事實は皆な公案なのであります。日本人としては平常のことであるが支那人には中々六ヶ敷いもの、それが解ければ悟り得るといふ程のものであります。

## 人と神との和合

それで日本人の結び合ひとは個人主義の如くに單に人と人が和合するのみならず、更に其に加へて人と自然と和合、其の人の居る土地と和合といふことが必要であります。この人と土地との和合と云ふことが、個人主義の様に土地からとることを主とするものには實に考へるに困ることでありますが、日本の農民の仕事考へて頂くとそれは良く判るのであります。更に又人と神との和合といふのが大切であります。この和合といふことが個人主義的に考へられた、神と人との和合といふことになると、これもまた非常に困難なことであります。それで色々の宗教に派が出来る。然し日本にしますと、今の例ですぐお判りになつ

たと思ひますが、餅をついて上げた云ふ行ひに依つて、祖先の靈と自分の靈とが結合つた、と云ふのが人と神との和合であります。そこで人と神との結合の中心として立たせ給ふのが 天皇であります。

故に 崇神天皇の御詔に、「人と神とを司牧する」と云ふのがあります。こんな語は世界のどこかの文献にもない、之を簡單に申しますと、北條泰時の有名な貞永式目の最初にもありますが、金光教の教祖が純粹な信仰といふことになつた場合に「信心してください、それによつて神も成り立ち氏子も立ち行く」といふて居ります。此れが日本の立場であります。かの「人と神とを司牧する」といふ語にはメーソン氏は驚いたのであります。メーソン氏は日本語は殆んど知らない人ですが自



ら云ふ「むすび」といふ一語をよく解すれば、日本の神道の全體がよく判ると。氏も日本人の弱點もよく知つて居りますが、氏は此の「むすび」といふことの上から、日本の長所だけを見て居ります。

### 人と機械との和合

斯う云ふ話がありますから、これもよくお聴きを願つて置きたい。私の研究所へ中等學校の先生等が絶えず六七十人づゝ來て居ります。この一月の末に工場の見学に行かれた。その時に歸つて來ての感想談であります。近頃の大工場へ行つて見ると、如何にも人が機械に使はれてゐるやうな氣がする、一寸見ますと誰にもさう感ぜられるであらうと思ひます。それで一人の先生が矢張其の感

想をもつて歸り、その翌日、或る講演會へ行つて講演を聴いたら、期せずして、同様なことを其有名な辯士が壇上から演説した、今日の資本主義の時代に於ては、人が機械に使はれて居る、資本主義時代は人格を無視して居るとか云ふやうな議論をされて居る。

くり返して申します、自分が工場を視察して其の感を得て來たのであるが、其を他人の口から聴かされると、どうかと云ふ感じを起す、茲に實に面白い點があります。此の事に就ては今日又省略致しますが、ともかく其のことを更に私に質問されたのであります。それで私は其の論理を説明し、更に日本のは人が機械に使はれるのでなしに結局日本人は、機械と和合するのであると答へたのであります。

そこに西洋人と日本人の根本的相違がある、西洋人では徹頭徹尾機械に使役せられるとより考へない、所が日本はその機械と和合するのであります。これが今日、日本の機械工業がどん／＼發達して來た所以であります。例へば紡績機械にしても、豊田式の機械は特に和合の出来る様に日本特自の機械を創作したのであります、其の和合の爲に從來世界に冠たりし英國のランカシャも遂に悲鳴を擧げなくてはならなくなつたのであります。機械と對立する、それは人と機械とは離れ離れになつて來る、故に機械に使役せられる、さう考へるから労働者解放運動も起るのであります。さて日本人としてはどう考へるか、例へば私が失業したとします。やつと某人に頼んで某の機械場へ就職することが出來たとする、そして初めて

そこに行つて見て不慣れた機械の前に立ち、其處で仕事をしなくてはならぬのかとした時に、私だとして悲觀しないわけには行かないのであります、こんな恐ろしい機械相手に油だらけになつて、俺は果してどれだけの報酬を貰ひ得るのか、そんな所で働いても一日二圓だとするならば二圓で嫌なら只やめなさい。そこで西洋人ならば二圓で嫌なら只やめるだけであります。イギリスでも、アメリカでも、今日失業者が無闇に多く出て、政府で補助しなければならぬやうになつたので、社會狀況が非常に變つて來たのであります。處が日本人はその時はどう考へるだらうか。私はこの仕事は嫌だ、然し嫌だから止めるとすると家に居る女房や子供が困る、親がことに困るといふことの爲に嫌だと云ふことは何時の間にかなくなつて、女房の爲



に、親の爲に、子供の爲に働くことになつて（拍手）この職場を受持つて忍耐する氣にもなるのであります。西洋人に妻子や親を考へる必要のないのと比較せられたい。段々やつて居ると、その機械と自分が結び付けられて働いて行く、遂には親や妻子や小兒や賃銀等は第二次的のものとなつて、仕事が第一義になつて来るのであります。

これが日本人であります。それだから又その機械を大切にします。命令せられた後に大切にするのは、西洋ならば命令せられた後に大切にしますが、日本は必ず自分の機械であるから大切にします、それで仕事を楽しくして業務に満足の念を持つて、この機械をよく掃除してから歸るといふ様になる。同様によき農夫ならば必ず道具から

先に掃除してからでないと休まない、自分の道具を粗末にする様な人ならば、よき農夫でもよき工夫でもない。

例へば盲者が杖をついて行くときは、杖は最早單なる道具でない、杖は自分そのものです、歩かないときは自分より離れた道具であります、歩くときは杖と手との間に自他の區別があつたら最早歩けない、杖と大地との間に區別がある。即ち杖は自分の一部分となる、我と杖とが和合してゐるが故に杖をついて歩ける、機械と自分との和合によりて自由なる生産が出来る。これが西洋から入つて来た機械を今や完全に自分のものとするところが出来た所以であります、それが日本の姿であります。自然との和合といふことは、今日は更に機械との和合が出来る、この點は西洋人には考へ

及ばない點であります、西洋人は西洋人流に日本の産業の進出を解釋して色々云ふて居るが皆な認識不足であります、近頃になつてやつと判つて来た様であります。

### 善と惡との結合

そこで日本は非常に難しい國になりました。善惡と云ふことをどう云ふ所に標準を置いて判断して行くべきか、本來己を捨てゝかゝると云ふやうなことが、日本人であるとするならば、己を捨てゝかゝつて居るやうな行爲の善惡と云ふことは單純に片付けられない。宗教的に云へば我執が悪い、それが根本惡だと見るのが普通であるが、始めから己を空とするものには、それはないのである。絶対に惡と云ふことは其故に日本にはないのである。

簡単に、私は然りと答へなくてはならぬのであります。

こゝに日本に於て非常に學問的に困ることが生ずる。よく學者は實際の場合に關して、それは目的はよかつたが、手段が悪かつたと云ふやうなことを言つて、ごまかすのであります。既に目的と手段を分けるといふ事が抽象である。或は目的がよかつたが認識不足だつたから悪かつたと云ふ、認識満足といふことがどうしたら出来るか、左様な理窟を言つて居たら、神や佛にならなくては何事も爲し得ないことゝなる。前にも一寸申した通り認識不足といふことで現代の若いものと、老人の間に非常な疎隔が出来たことを残念に思ふ、これは教育者として重要問題だと思ひます。若い人は云ふ、老人と話をしても判らぬ、判らぬものと



話しても仕様がなまいといふ。斯くて老人と若い者との間に、結合が非常に困難になつてゐるのが現在の状態ですが、だからといふて若いものが一概に悪いと云ふ譯にいかない。

そこに日本では善と悪とをまた結合せてといふことがある。而てこれが西洋あたりでは考へつかない又日本特自のものとなすべき大な點があると見なければならぬ。善と悪と結び合すと云ふことはどうして出来るか、即ち斯る重大なことが古事記に既に明記せられてあるのであります。古事記によれば其の働きをば直毘靈といふ神とする、而て其の實踐者が天照大神であるのであります。古事記に傳へられる神話の御話は茲には省きますが、それが殊に現在に於ての問題となつてゐる一つのお話をこゝに致して置かうと思ふ。

或る若い検事の方の御話であります。一體検事と云ふ職は、どう云ふのかと考へますと、罪人を檢舉するといふことであります。然るにそれが日本では上記の如くにそう簡単に往かないことを實際に當つては痛感せざるを得ないといふことから、問題が起るのであります。一寸簡単に考へると、罪あるものを檢舉し、どこまでもそれを罰して行かふと云ふのが検事の仕事で、それは何でも法律に照らしてやればよいと考へられます。所謂法治國といふ立場からは検事は最も峻烈であるべきであります。

所が西洋の立場で言ひますと、この善悪と云ふ判別法が、權利、義務と云ふ點から割り出すことが出来る、更にもう少し詳細に云ふならば、利害關係によつて結合して居る、社會であるが故に其

を犯すものは社會悪であります。反社會者が即ち罪人であるから、罪人は刑務所に入れる、然し罪のあるものが段々殖えて來たらどうするか、全國が刑務所にならなければならぬ(笑聲)

大分前の話でありますが、西洋流の斯る考へが日本でも一般になつて縣廳でも、文部省でも、内務省でも社會局と云ふものが出來た、それは西洋の眞似である。當時大學の教授の某氏が西洋學說の受けうりをして、反社會的のものを生ずるは社會全體にも罪があるのであるから、刑務所を拵へて、それを社會から隔離する、又低能なものは低能なものを置く場所を造つて、社會から別にする、また精神病は社會的の悪だから、これも社會的の施設をして、精神病院を造つて其等を收容して社會を安全にしなければならぬ、何もかも自分

等に都合の悪いものは、社會局で、社會的の施設で例へば感化院へ入れたり、刑務所へと入れるといふ様な議論をせられたが、成る程一應は都合のよい考へであります。

然し私は其の時批評した、そんなことをしてどうするんだ、その費用は誰が出すのかと、私は其の當時笑はれました。然し今日の状態は果して如何。社會といふ考へから起つて、現在英國は失業者の爲に困窮して居るのではないか。刑務所や、感化院や、精神病院や、失業者收容所や養老院や等々で國中が一ぱいになる、そしてそれで其の事業が發達したと社會局の人々は自慢し得るのかどうか。私は又其の當時に於ては一向笑殺せられて居たのでありますが、其處には日本の家が有つ特種の機能を考へたいのであります、そして今日で



は大分其の考へが進んで參つたことを喜ばしく思ふのであります。

今申し上げた検事の方は斯う云ふことを言つて居る。「私は若くして人種問題に悩み、道を求めて煩悩と遍歴と悩みと幾星霜を過ごした後司法官となつた。併し私に取つて法律は柴の枯葉を考へる如き情けないものである。無味乾燥の法律を前にして幾年私は悩んだことか、法律があつて、人が人を起訴し、人が人を裁判するのを淺間しく思つたことさへ幾度かあつた。」と。個人主義の立場で言ふならば、法律の條文がありますからそれでよいやうに一寸思はれるのでありますが、特に日本人として育て上げられたものに對してはその適用といふことに於て満足出来ない、結局裁判官がいくら法的に公平にと氣張つた所で、畢竟人が人

を裁くことに過ぎないのであります。

それで日本に於ては、特に憲法に於て、陛下の御名に於て裁くと云ふことに決められて居る、人が人を裁くのではない、陛下の御名に於て裁かれるべきものである。所が日本の法官はそれを忘れて居る様な點がありはしないか、あの若き検事は遂に人が人を裁いて居る實情に考へなくてはならなかつたのである。それでつゞけて云ふ「私は始めて法律とは何ぞや、正義とは何ぞや、善とは悪とは何ぞやと思案の旅を続けなければならぬ。善悪不二にして、正義が其の時發見せられて行くのを見た」といふて居る。

善悪不二といふことは佛教にも云はれるが、眞の姿は上述の通り日本に於てのみ特に言ひ得ることとて、右足と左足の對立である。日本に於ては常

に其の左右の結び合ひ即ち歩行といふ立場で物を見る。然るに權利義務の思想は常に右と左とを對立的に考へる。それと同じやうに、善と悪、善はこうだ、悪はこうだと、抽象的に決めてかゝるのであるから只理論上では結合が出来ても、實際には抽象的であつて、實際的ではない。日本ではよく犯罪があつても、刑を執行しても、その犯罪をば、只犯罪として捨て、行くのではない、そこにもまた日本の善惡に就て語られる大事な所でありませぬ。惡犯罪があつても、それを直毘靈に據つて思ひ直し見直して、惡者も善化せんとするの努力となる、此の努力こそ即ち最高の善である即ち「正義はその時々に見えられて行くのを見るのであります」。

故に氏は又つゞけて云ふ、刑罰はたゞ大慈悲の

發露として課せられるのみである」と、これは日本流であります、而てそれは又佛教によりて日本人が自己を深めた精神であります。即ち佛教ではお地藏様と閻魔様とは同一體だと見るのであります。それで同氏の云ふ如く、刑罰はたゞ大慈悲の發露として課せられるべきものである、と云ふ民族の宗教的信念と國民の倫理的情操の中に法律の生命が宿るを知つた、即ち法律と道德と宗教とは決して別のものではない。一體不二のものである。従つて檢察と云ひ、裁判と言ひ、調べをするものと、調べを受けるものとの魂が相抱き、相擁護して行く、其處に正義を發見して行くものである。裁かれるものと、裁くものとの間の魂の抱合といふこと、これが今日本の復活しやうとする所の力ではありますまいか、以和爲貴となす聖徳太



子の御精神は永恒のものであります。

### 魂と魂との融合

それならば此の魂の抱合といふ様な検擧の仕方とはどんなことであるか。今某長官になつて居る方が検事であつた時にやつた一つの仕方を例に取りませう。

或る立派な位置にある人が瀆職事件に引つかつた、七人の検事が行つてそれ／＼研べて大抵判つて居るのであるが、どうもその人が白状しない、それで其の方が八人目に行つて、家宅搜索に行つて、しらべたが最早何の材料も残つて居ない。所がその家に入つて見ますと、たつた一人中學に行く子が茫然として居る、「お前どうしたんだ」と言つて問ふと「父さんが捕はれてから私は

學校に行けないから毎日ブラ／＼して居るより仕方がないんだ」と淋しい顔をして居つたのであります。「もう外に助ける人はないのか」と訊くと一罪を犯したと云ふことで誰も寄りついてくれないので私はどうにも仕様がなない。そこで色々前から調べ上げたのを見ますと、その子供一人が可愛い爲に後妻も迎へないで子供の成長を唯一の楽しみにして居た、悪人でない、それが色々深入りをして、どうしても金をとらねばならぬやうになつたので、受取つた。たゞ可愛い／＼の一念の上から、起つた犯罪です。

そこでその検事は言つた。「お前の父さんは罪を犯したが、實を言ふとお前が可愛いが故に斯う云ふ罪を犯したんだ、それに子供がそんなことでブラ／＼して居つてはお父さんの御恩に背く、學校

へ行け」「學校へ行けないぢやありませんか」「俺が行けるやうにしてやる」と言つて親戚の人や近傍の人々に子供が明日から學校へ行けるやうに話してやつて、歸つて来て、留置所に行つて、「お前の所へ檢察に行つたら、斯う云ふことを子供が言ふから、子供を學校へ行けるやうにしてやつたぞ」と言つたら、その被告が「悪うございました」と云つてすつかり白状した。

さうすると罪は罪ですが、罪を犯しても、その罪を喜んで受けようとする、其處に正義が成立つて行くのであります。罪を放つて置いて許すんぢやあない、犯罪者をして、喜んで罪に服せしめると云ふ所に、法律の力が出で、正しいものが成立つて行くのであります。

これは丁度涅槃經の釋尊が提婆に導かれた大惡

逆の阿闍世王を助けたのと同様の方法であります。魂の觸合ふと云ふことに具體的の正義が立つて行くのであります、日本では之を 陛下の御名に於て裁くといふ其處に日本道が立つて来る、日本の道が立てられると云ふ所に罪の定りがある。これは検事はたゞ検事として罪人を曝かふ、又罪人を云はゞ造り出そうとするのぢやない。検事は己を殺してしまふと云ふ所に検事と云ふ職も亦立つて行くのであります。

私はこの話を左翼によつて所罰せられた人の前でしました時に、其の人は云ふその通りです。我々は自分達の精神をよく検事や裁判官が聞いてくれれば、判決がどうであらうと云ふことは最早問題でない。即ち魂と魂の結び合ふ所に、動いて行くものならば、どんなことであらうが、結果は



如何になつても願みない。斯う云ふのが日本人の立場であります。

### 人としての究極の道

即ち魂と魂の結び合ふ所、解け合ふ所、それが檢察の仕事に於ても共に 陛下の御名に於て裁くと云ふことになるのであります。悪人と雖も亦陛下の赤子でありますから、こゝに個人主義的の法學で考へられた法治國といふ概念と日本の憲法とが昨年議政壇上に於て正面衝突を起したのであります。然し、これは單なる議論上の問題ではありませぬ、實際的の問題であつて、中々困難であります。

先刻の總ての點に於て「とりやり」を變じ、「やりとり」に建直して行くことで、それは口先

きでは日本の本來の働きに還元することでありませんが、云はゞ逆立ちになることであるから、一朝一夕には出来ませぬ。若い人はさう云ふことを知ると、又直ぐやらうとしますが、それは單に知識の上である直ぐ出来ませぬ。十年や二十年掛らなければ直らぬ、過去六十年掛つて拵へたものから一夕一朝に行くものではない、一寸した時に引いた風邪でも一週間はかゝるのであります、それを一足飛びにやらうとするのは又善惡をハツキリと定めてかゝること、それからして、それを如何にして結合せるかと云ふことは、已を捨てなければならぬであります。其處に又我等日本人は天照大神を御力とし且鑑としなければならぬ。

人の悪いことを認めた場合に、一應は慈悲、愛の心を持つてそれに對することは出来るが絶對の

愛はどうして出来ない、「己を空する」さうすると天地晦明になるといふだけの徳が積まれて居なくてはならぬが、その爲に多くの人々が和合の力を以てそれを誘ひ出し申した。そして其處に一圓融和が出来る、それが日本の姿であります。

天照大神は決して始めより女性の神ではない強烈な太陽でありますが、其の御徳が、母親が子供に對するやうな愛の力でありますから「永恒郎女性」として表象したのであります。神武天皇に仰せられて居る「上は以て乾靈授國の徳に答へ」との其の徳は比であります、「保合大和」御徳であります。

「下は以て皇孫養正の心を弘め」と仰せられたのは、皇孫が御徳をつぎ、一般の民草を仕育せられた、其の御心を弘むといふ意味で、即ち古事記の

物語りが、「邦家の經緯にして王化の鴻基なり」とは又此の意義のことであります。

然るに此の帝國臣民をも個人主義的に解釋して御覽なさい。隣によい場所がある、それは我が子孫のものであるというたとて、それで天壤無窮の詔勅になり得ようか、故に日本以外の國では君主は皆な征服者であり、他のものを奪うたことになるのであります。

古事記によれば皆な兩神の生み給ひしものであり、大業の確立者として皇徳があるのであるから、然も大神の此の御徳によりて始めて此の御勅語に絶對の意義が生ずるのであります。此は唯に日本人の道のみならず、人が人としての究極の道であります。故に世界の八聖が叫んで人々教へたものを、地道で行つたのが日本人である。所が個



大賣捌店

大賣捌店  
 全國配給  
 森田書房  
 新正堂書店  
 啓徳社  
 東鐵公認鐵道賣店賣捌所  
 鐵道保養會  
 鐵道弘濟會  
 鐵道授産會  
 富田報英堂  
 川頭春陽堂  
 菊竹金文堂

◇全園有名書店・驛賣店に在り………  
 ◇………賣切の際には本社へ申込下さい

不許複製

昭和十二年一月十五日印刷  
 昭和十二年一月十八日發行

「如何に死すべきか」

定價金 十錢

送料 二錢

著者 紀平正美

東京市京橋區銀座西六ノ二

發行人 吉田謙太郎

東京市牛込區矢來町三六

印刷所 清揚社

東京市京橋區銀座西六ノ二海洋ビル

發行所 日本講演通信社

電話銀座(57)六六一〇番

振替東京四〇三八八番

人主義が入つて来て、日本人でも自己意識があるから、利益といふことからそれに迷はされた、迷はされた結果、今日の状態になつて来たのであります。

始めに申し上げた如く事件に逢うて、如何に死ぬべきかと云ふことを考へて居りました時に、八聖殿で講演をせよと云ふことになつたので、直ちにこの題で日本の特色を申上げたのであります。それは結局八聖の述べた所を地道で實行して行くことと云ふことであります。

長く御静聽を煩しました。(拍手)了

昭和十一年三月二十二日八聖殿第二十五回講演

講師紹介

紀平正美氏略歴

明治七年四月三重縣に生る、東京帝大文科哲學科卒業、大正八年學習院教授に任ぜられ、傍ら東京帝大、東京文理大、東京商大に哲學を講ず。同十二年文學博士の學位を受く、國民精神文化研究所員たり。「行の哲學」「哲學概論」「認識論」「自我論」等數多の著書あり。



…者驅先の代時は人む讀…

296	295	294	293	302	291	290	289	288	287	286
谷 堀原 武 茂久	白 柳 秀湖	高 木 友三郎 エトーマス	中 野 江漢	阿 子 島 俊治	金 子 堅 太郎	松 本 忠 雄	伊 藤 病 巖	池 田 人	笠 岡 果 雄 デジエローム グイム	本社主催 選挙正 産議正
産業組合に關する諸問題 商權擁護運動は發展するか	歴史とチャイナリズム	エチオピア問題と世界經濟界の動 日本國民に懇ふ	生命線確保の二巨頭 南司令官と松岡總裁	次の政局を支配するは誰か	帝國憲法制定の精神	最近の支那經濟事情	小栗上野介を語る	エチオピアはどうなるか	東西交通史を辿りて 米國資本主義とNRA	斯界の權威者に選挙肅正を聴く
307	306	305	304	303	302	301	300	299	298	297
下 中 彌 三郎	御 手 洗 辰 雄	永 田 秀 次 郎	梅 崎 卯 之 助	三 島 康 夫	岩 木 哲 夫	大 久 保 幸 次	相 馬 愛 蔵	梅 村 正 憲 フーレン・ 鹿 久 恒	勝 正 憲	岡 野 龍 一
何が健全財政か	滿蒙の現状	偉大なる平凡弘法大師と日本文化	海軍より見たる現下の世界狀勢	北支の獨立と蔣介石政權	誤れる米穀自治管理法案を糾弾す	新興回教世界と日本の使命	商店經營の秘訣	神道の世界的精神 日本精神と佛敎	非常時財政と税制問題	北支問題と軍部の動向

# 日本講演通信

行發回三月毎

購讀料
一冊十錢
一月三十錢
半年八十錢
一年一百五十錢

◆政治經濟其の他時事問題にして社會人として知らねばならぬ緊要なる事柄は細大漏さず急速且懇切に毎月三回定期に直接讀者に郵送してゐるから本通信の愛讀者は時代に取殘される心配がない。

◆一流名士の心血をそつがれたる講演を練達有能なる速記者の手にかけたもの故、文章體と異り専門的難解の問題をスラスラと肩も凝らす容易に讀了し、會得する便宜がある。

◆千、百の見出し目録を、でかどかと並べた所謂一流雑誌でも眞に讀むにたへのある好篇は其中に一つか二つだ。頁數や目録が多いのがよい雑誌とは限らないその意味で講演通信は無駄がない。

◆本通信は輕快手頃な四六判、普通三十二頁より四十八頁標準故携帯に便であり、裝幀上特に留意せる綴込式故参考上の保存、索引等に適切である。

購讀の方法

◆購讀料送金は振替口座(東京四〇三八八番)を御利用下さい安全確實です。

◆購讀料は前金に願ひます。

◆雑誌送料は本社で負擔して居ります。

◆住所姓名は御明記願ひます。

維持會員

本社維持金一年十圓

定時刊行物に於て本社の主權に係る一切の集會等に招待し、且本社の各種目に於て特別の便宜を供す。



337  
847

338	337	336	335	334	333	332	331	330
柴田 武雄	高橋 龜吉	米田 實	紀平 正美	海津三 清一	高橋 龜吉	松島 誠二	吉岡 文六	土肥原賢二
日露伊豫定戦果の考察	最近に於ける日本経済の動向	満洲の動向とその發展	如何に死すべし	地方税制の整理に就いて	増税の經濟界に於ける影響	税制整理に就いて	最近の日支關係	滿洲事變五週年記念日に際しての所感
議政	官産	官産	官産	官産	官産	官産	官産	官産
保建國軍に就て	推介石と張學良							

## 動運民國新と部軍

著 夫 富 本 松

- 目次
- ▲ 時局に處する軍の決心
  - ▲ 皇軍本来の使命
  - ▲ 軍備と國民の覺悟
  - ▲ 國民運動展開
  - ▲ 立憲政體の再檢討
  - ▲ 明治天皇と御維新
  - ▲ 軍部の衰
  - ▲ 臣節の大義と國民の覺悟
- 定價十錢 送料二錢

## ... 信 通 演 講 本 日 ...

(厘五料送 錢十 價定各)

318	317	316	315	314	313	312	311	310	309	308
伍堂 卓雄	米田 實	齋藤 隆夫	大口 喜六	小玉 義雄	勝田 貞次	高神 曼昇	水谷 信雄	清水 盛明	岡野 龍一	五百木良三
獨逸は何處へ行く	エチオピアの敗戦に伴ふ歐洲の政局	軍民一致論の提唱	増税を繞る馬場財政の検討	非常時に於ける燃料問題	經濟日本の進路	人間淨土の建設	廣田内閣を繞る自由主義と國家主義の對立	滿蒙蘇國境事件と日蘇の關係	軍部の非常時觀	極東の危機と日露の宿命
329	328	327	326	325	324	323	322	321	320	319
勝田 貞次	長谷川 了	山本 厚三	興野 一秀	高木 陸郎	池尾 芳藏	大和 田佛二	池崎 忠孝	秋尾 廉	富田 勇太郎	三枝 茂智
日本資本主義の新段階	南方政策とフィリッピン	義務教育年限延長の種々相	西班牙の動亂と歐洲諸國の動向	最近支那の動靜	電力國營案に就て	何故に電力を國營にするか	無條約時代の日米海軍	庶政一新と肅軍問題	最近の歐米經濟事情	内政と外政との關係



内閣調査官 奥村喜和男著 四六判 二〇〇頁 定價五十錢 (送料四錢)

# 電力國策の全貌

最新刊

!! 再版 !! 再版 !!  
!! 忽ち十版突破 !!

頼母木遞相提案の電力民有國營案を繞つて、國有國營論あり、民有民營論あり、今や、電力國策問題は、朝野論争の焦點となれり。果して電力國營是か否か、先づ成案者と謂はれる奥村氏の原著によりて其の眞髓を把握せよ。然らざれば電力國策を論ずる資格なし。庶政一新は電力國策より!!

東京 日本講演通信社 發行

# 終